

【1日目】

森での訓練中の出来事。何やら騎士団長の様子がおかしい。妙に呆けているというか、訓練に身が入っていないようだ。

そして休憩中、その団長と呼ばれ人気のない茂みへ向かったところ、突如そこにいた団長が俺を押し倒し、股間へと手を伸ばしてきた。

すまない…いきなりこんなマネをして…。

先日の任務で戦った淫魔の怪しげな魔術を食らってから、なんだかおかしいんだ。

体が疼く…男を襲って精を奪いたくて仕方がない…！！

…おそらくあの術は人を淫魔に変えてしまうものなのだろう。

この衝動に身を任せて、純潔まで失ってしまえば
きっと私は心まであの淫魔どもと同類になってしまう…。
そんな気がするんだ。

だが、腐っても私は騎士。
あんな見境なく体を重ねるふしだらな魔物に
成り果てるわけにはいかない。

だからせめて…心だけは『人間』でいる為に。
少しでもいいからその…キミのせ…精液を飲ませてくれ…！！



ん…んぶう…じゆるツ…!! …ふはあッ!
まさかこんな不潔なものを
口に入れなければいけなくなるとは…
…ああ、いや。キミに対してではないよ。
こういった行為自体に抵抗があるんだ。

はむ……。
んう…じゅぶ…じゆる…。
ひかひ…なんだ…。
ぢゆる…だんだん…んっ…ひはじゃ…なふなっへ…
(だんだん…嫌じゃ…なくなつて…)





う…なんだこれは…

熟れた高級果実のような甘味と酸味…
青臭いはずなのに何とも癖になる香り…
そして口にほどよく馴染み、
この味と香りを引き立たせている温度…

こんなもの…今まで味わったことがない。

今まで汚らわしいものと思っていたが…
男の精液とはこれほどまでに味わい深いものなのか…!!



【2日目】

今日は非番だったため自室でゆっくりしていたが、急に団長が俺の部屋を訪ねてきた。

自分から鎧を脱ぎ、肢体を曝して俺のモノを求める姿は威厳に満ちた歴戦の騎士ではなく、場末の娼婦のように見えた。

昨日キミから精液をもらったおかげで大分楽にはなったんだが…その…あの味が忘れられなくてな…。また、分けてはくれないだろうか…！

はああ……♡
それにしても昨日に増してすごいのうだ。
だが不思議と嫌な臭いではなく、むしろ……♡



んう……はあ……♡
昨日よりは上手く出来ていると思うのだが……どうだろうか？
……すごく気持ちいい？ そ、そうか……。

その……私もな？
私の都合で付き合ってもらっている手前、せめてキミには
気持ちよくなってもらいたいと思っていたんだ。
だから、正直なところ……少しうれしいよ……♡



んっ……ふう……

やはり……この匂い、香り……

今まで食べたどんな料理よりも美味だな♡

しかし、キミのおち……性器のを嗅いだ時は
昨日以上に美味しそうな匂いがしたんだが、
心なしが昨日より味も香りも薄くて少し水っぽいような……
量も少ないようだし、体調が優れないのか？

ぞりっ♡

え？昨日の今日でそんなに溜まっていらない？
そうか。そういうものなのか……



【5日目】

目を疑う光景を目の当たりにした。
騎士団の同僚たちが、全裸で何かを取り囲んでいる。
何事かと近づいてみたところ、
その中心にいたのは女の姿をした魔物。

いや…団長…か？

おお、キミか。

…この姿が気になるか？

やはりあの時の呪いが原因のようだな…。

結局、姿までは人のままでいることはできなかったよ。



しかし、私はまだあの淫魔どもとは違うぞ？。

ザーメンも経口でしか摂っていないし、貞操も守っている。
心はまだ人間だ。

しかし、体の変化にあわせて欲求は
どんどん膨らんでくる一方…。

キミのだけでは満たされなくなってきたので、
他の団員たちに協力してもらっていたところだ。

どうした？おちんちんなんか取り出して。

…もしかして、キミもシたいのか？
ふふ…、キミもここにいて皆と一緒にだな。

私を見るなり、まるで何かに取り憑かれたかのように
ソレをしごき始めたんだ。



何、謝る必要はないさ。

私もキミ達のサーメンが欲しくて舌が疼いていてな。
ほら、唾液がまるで愛液のようだろう？

私はいつでも大丈夫だから、
皆と一緒に遠慮なくこの口めがけてぶちまけてくれ。

んふ：♥まったく、体中がザーメンまみれじゃないか♥
やはり服は着ずにいて正解だったな。

最近は全身に纏わりつく布の感触も不快に感じていたし、
どうせ汚すだけならわざわざ着ている必要もない。

そんなことよりも、全身から漂う
落ち着くような、むしろ昂るような…。

なんとも言えない香りが堪らないなあ♥

こっちは甘い。こっちは酸い。

ザーメンにも色んな香りがあるんだな。どれも素敵だ♥

へろっ♥

んぐっ

んぐっ

それに…匂いだけじゃない。
味や食感もそれぞれ違うんだな。

そのキミの精液は随分と粘つくて、
いつまでも喉の奥に絡みついてくるから、ずっと味わっていられるよ。
それに比べてそのキミなんかほとんど水みtainな精液じゃないか。
さては自分でシコったばかりか？

これからは全員オナニー禁止だ。
キミたちが溜まっている時が私の『食事』時だからな…♥

『日目』

今日もあの淫魔…いや、団長が俺の部屋にやってきた。
一体何人の精を口にしてきたのか、饅えた臭気のある口で
俺のモノを舐め、啜え、精を貪る。

俺たち騎士団の男たちはこうして連日連夜
意識を手放す直前まで絞りつくされていた。

ほおら、私の舌コキはどうだ？
より『食事』を愉しみたいと思っていれば
舌がさらに伸ばせるようになってな。
こんなこともできるようになったんだぞ♡

ん？これ以上出ないだろ？
これしきのこと弱音を吐くとはまったく情けない。
私はもつと『食事』がしたいんだ。
キミたちにはまだまだ頑張ってもらわなくてはな。



出ないといいつつ、まだ奥の方には残っているだろう？
私の舌で掻き出してやろう♡

ははッ！舌先でザーメンの味を感じるなア？
やっぱり奥の方にはしっかりと残っているじゃないか！

痛い？苦しい？
チンポパンパンに膨らませながら言っても
説得力がないぞ？
尿道ほじられて感じるなんて
キミはとんでもない変態だな♡



ふう、ごちそうさま♥

最初に比べてすっかり薄味になったが、さっぱりとしていて回直しにちょうどいい。

さあで、そうなるとデザートも欲しいな。団員たちのザーメンも味わい尽くしたから街の若いオスでも漁りにいこうか。

満足のいく『食事』をし続けなければ、私は本当に心まで淫魔になってしまうからな♪

…なに？もう淫魔そのものだと？

何を言う。あんな見境なくおまんこ曝け出してチンポスゴバコすることしか頭がない連中と一緒にするな。

私だって本当はこのカラダ全部使って、

その魂の一滴まで搾り尽くしたいと思っているんだ。だが、私は高潔な騎士だからな。最初の誓いは忘れていない。

だからこそ、今もこうやって『食事』は口で味わっているんじゃないか。とても『マズゲン』らしい行いだろ？

ふふッ…♥

